

# Reactor Physics Asia conference report

片桐 耕司

## 1、 発表準備

RPHA への参加は昨年の年末頃から決まっていたため、年度が明けた4月には準備を始めることが出来た。発表準備は主に、i 論文執筆、ii 発表資料作成、iii 発表練習の3つに分けられる。それぞれの開始時期はiが4月下旬、iiが7月中旬、iiiが8月上旬であった。学会の発表は2回目であり、更に国際学会での英語発表は初めての経験であったため、いずれの段階でも指導教官である千葉豪先生よりアドバイスを頂きながら行った。特に論文の執筆には多くの時間を費やした。これは論文で用いられる特有の言い回しや、専門用語の正しい英訳など、未経験では戸惑う部分が多々存在したからである。しかし、千葉先生からの指摘を基に修正を重ね、提出することが出来た。英語論文作成の経験は必ず今後生きると思う。

## 2、 成都へ

そしていよいよ成都へと旅立つ8/22(火)を迎えた。私と、同期の二平は飛行機の都合上成都への飛行機が発つおよそ6時間前に成田空港へと到着した。期待と不安が入り混じる中、二人で長すぎる乗り換え時間を消費し、ついに成都へ向けて旅立った。飛行機は専ら国内線利用で、国際線での過ごし方が分からない私は、食事以外のほぼすべての時間を寝て過ごした。約5時間のフライトの後、ホテルへの移動という最初にして最大の難関が訪れた。今回、北大からの参加は4名(千葉先生含む)であったが、タクシーを分かれての移動は不安だったため、半ば無理やり一台のタクシーへと乗り込んだ。しかしこのタクシーが筆舌に尽くしがたい運転であった。恐怖と本当にホテルへ向かっているのかという不安から、何もしゃべることが出来なかった事だけは覚えている。なんとかホテルへ無事到着し、その日は泥のように眠った。

2日目は夕方の開会式までフリーであったため、成都市内を観光した。三国志好きの千葉先生の提案により私達はかつての蜀の都跡地へと足を運んだ。そこは歴史を感じる街並みが再現されており、また多くの観光客で非常に混み合っていた。中国の歴史と文化を感じた貴重な一日となった。時間の都合上、パンダ繁殖基地へ行くことが出来なかったのが残念である。



本場の四川料理

### 3、RPHA2017の二日間

24, 25 日の二日間、RPHA2017 が開催された。日中韓の三か国より集まった、約 100 人の研究者や学生が発表を行った。私の発表は二日目の午後であったため、一日目と二日目の午前中は他の発表を聴講した。発表を通して感じたのは、他国の学生（特に韓国の学生）の英語力の高さである。これは聞く、話す、書く全てで日本の学生より高いレベルであった。また発表内容についても、初めて聞く内容や研究が多く、とても勉強になった。特に同じ分野の動特性解析についての発表は興味深く、刺激をもらった。また、名古屋大学の学生の発表を聞いて、資料の作り方に感銘を受けた。限られた時間内で、いかに丁寧に背景や手法を説明できるかが大事だと感じた。

私も、Reactor Transient Analysis-I のセッションで発表を行った。聴講者はとても少なく、発表者を除くと 10 人ほどしかいなかった。発表は練習を積んでいったこともあってか、スムーズにしゃべることが出来た。質疑では聴講者が少なかったこともあり、質問が出ず座長の方より 3 件ほどいただいたのみだった。いずれの内容も基礎的な内容に関する質問であったため落ち着いて対処することができた。様々な質問を想定していたため、質問が出なかったのは残念ではあったが、初めての国際学会の発表を終えることができ、地震になった。

### 4、RPHA2017 を通しての感想

RPHA2017 を通して最も感じたことは、英語力の重要性である。これは言わずもがなのことではあるのだが、今回の学会で心の底から実感したためである。今まで、渡航経験がなく、英語を使う機会は授業や留学生との会話程度であったため、必要に迫られるという場面はほとんどなかった。しかし海外で滞在し、



発表の様子

母国語が異なる人々とも最低限の意思疎通や情報を共有することができるツールとしてとても有用であるということに気づくことができた。今後、より積極的に英語を使っていこうと考えを改めることができた。また、発表を通して、研究成果をこのような形でまとめることにより考えがよりまとまるということを感じた。普段研究をしている際は、目の前の問題に対処することで精一杯になってしまい、なかなか長期的なビジョンを持って進めることができていなかった。しかし、このような発表の機会でまとめることにより、普段は見えなかった問題点や方針を見つけることができた。

期間中、国内外を問わず多くの学生と交流をもつことができ、とてもよい機会となった。この経験を、ステップアップできるよう普段の研究生生活に生かしていきたい。